

「死の家の記録」（ドストエフスキー）

シベリアの或る町にゴリヤンチコフといふ名の流人るじんがゐた。元は貴族で地主だったが、嫉妬に狂ひ妻を殺して投獄され、町にある要塞の監獄で十年の刑期を勤め上げ、その後、自らの徒刑生活の記録を遺して死んだ。即ち彼の云ふ「この世ながらの死の家」の記録であつて、それがこの作品で紹介される譯だが、よく知られてゐる様に、作者ドストエフスキー自身、思想犯としてシベリアに流された経験がある。頭髮の半分を剃られ烙印らくいんを捺おされ足枷あしかせをつけられて、二十八歳の時から四年間、慘憺さんたんたる監獄生活を送つたのだが、その経験に基くこの作品には後年の大作家の片鱗へんりんが隨處ずいしょに示されてをり、就中なかんづくそのダイナミックにして深刻な人間理解は如何にもドストエフスキーらしい。

例へば、「血と権力は人間を酔はず」とゴリヤンチコフは記録に記すが、それを身を以て示す暴虐この上なしの要塞參謀は固より、彼に虐しひたげられた二百五十人の囚人仲間の中にも人間の皮を被つた野獸はわんさとゐた。「もの凄い凶暴性」の持主ガージンは「ただの慰みに」子供を「楽しみながら、

なぶり殺し」にした怪物であつた。だが、誰よりも戦慄すべきはブリューローフで、彼は人間が「どこまで墮落し、陋劣化」し得るか、「いかなる程度まで自己の内部にあるいつさいの道德的感情を殺して、苦痛も悔恨も感ぜずにゐられるか」を證す「最もいまはしい實例」であつて、その恐るべきシニシズム故に、彼は「一杯のウォートカ」の爲に平然と人を殺したであらうと記されてゐる。そして、後に「地下室の手記」の語り手は、世界滅ぶとも自分が「一杯の紅茶」を飲めればそれでいいと嘯く事になる。けれども、やがてゴリヤンチコフは、獄舎の怪物共を「標準として、すべての人を律しよう」とするのには「間違ひであつた」と悟る。「憎むべきものの中に喜ばしいものが潜んでゐる」事を知つたからだ。或る小柄の舊教徒の老人からは、如何に執拗に觀察しても「虚榮心とか傲慢とかいふものを毛筋ほど認め」られなかつたし、何よりもマレイといふ無垢で優しい美少年がゐて、彼は「生まれながらにしてこのうへもなく美しい資質を恵まれ、神の恩寵をほしのままにしてゐる」若者なのであつた。「白痴」の末尾近く、マイシュキンとラゴージンといふ二人の男に引き裂かれた思ひを抱くナスターシャは、二人に向つて、「あたしは生れて初めて人間を見た」と叫ぶ。この叫びは、彼女が人間の「高貴と墮落の兩極端」を、「人間性に於ける可能性の全範圍」を明確に自覺した事を示してゐるとG・スタイナーは「トルストイかドストエフスキーか」に書いたが、ゴリヤンチコフ即ちドストエフスキーは「死の家」を経験して、人間性の「兩極端」の途轍もない「可能性」に目を見開かされる思ひをし

たに相違ない。

處で、ドストエフスキーが流刑囚となる數年前、若きメルヴィルは捕鯨船に乗込んで、雑多な人種・國籍・階層からなる荒くれ者の乗組員仲間と世界の海を經巡りながら、「陸の世界」とは隔絶した「海の世界」の現實を知り、後に「白鯨」の語り手イシユメールをして「捕鯨船は自分のエールにしてハーヴァードであつた」と語らしめた。十九世紀のロシアとアメリカとを代表する二人の大作家がほぼ同時期に共に尋常ならざる經驗を嘗め、人間性への理解を深める糧としてゐた譯である。「白鯨」の次作「ピエール」の主人公は云ふ、「人間の心を發かうとするならば、我々は深く、深く、何處迄も何處迄も深く穿ち進まねばならない」。さういふ知的勇氣こそ我々は何よりも見做はねばならぬ。(米川正夫譯、ドストエフスキー全集4、河出書房新社)